

視点・論点・ところてん

「アクティブラーニング」について

1. はじめに

新学習指導要領の概要が発表され、短期間ではあるが文科省はパブリックコメントを募集中だ。

新しく教科となる「英語」について、前回はその問題点を洗い出した。今回は「アクティブラーニング」を中心に考えたい。

そもそも「アクティブラーニング」という言葉は改定の初期の頃からずっと、学習指導要領のメルクマーク（指標）として表舞台で発信されてきた。ただ、それが裏目に出たのだろう。言葉だけが一人歩きし、何でもかんでも「アクティブラーニング」に関連付けられ、「結局、アクティブラーニングって何？」という状況になってしまった。最終的に「アクティブラーニング」という言葉はなりを潜め、今後は「アクティブラーニングの視点で……」という文言が中心になるようだ。

「アクティブラーニング」を直感的に訳す

と「主体的な学び」となる。そもそも教育の歴史において「教授（教え授けること）」と「学習（ならい学ぶこと）」は時に対立的に捉えられ、振り子のように議論が行ったり来たりしている。一方的な教え込みは教育効果が乏しいということは十分に理解できる。しかし、子どもたちが自ら問題の解決に向けて学ぶためにどこまで教員が支援し、解決の糸口をどのように提示するかは論議は難しい点も多い。

2. 子どもたちに学びとらせる実践

過去大阪支部で「子どもたちにまるごと学び取らせる、闇に明かりのサッカー実践」（タイトルの記憶はあいまいです）があった。これは北河内Bの山本雅之先生が実践したもので総授業数は88時間にも及ぶ。今では考えられないような実践であった。

ともかく、当時の球技プロジェクトで考案された系統的・段階的な技術認識の一つひとつを、実験や検証によって子どもたち自身で見つけていこうとする実践であった。山本先生は「教えたい気持ちをぐっところえ」気づくためのポイントを少しずつ示しながら子どもの理解と習熟を待った。その結果が 88 時間の実践となったのである。

すべてを子どもの手ゆだねると 88 時間もかかるということは私たちの一つの教訓となった。それを機に「技術のポイントを明確にして指導する」ことや「教えたい中身の絞り込み」などについて私たちは研究を深めることができたのである。

今回の学習指導要領は学習内容の削減は行わず、新しく「英語」や「道徳」を追加している。加えて「アクティブラーニングの視点」で子どもたちが自ら考え、自ら解決する学習のスタイルを要求されているが、果たして時間的に可能なのだろうか。「絵に描いた餅」にしかならないことが見えている。そう考えると「すべての子どもたちの成長発達を願う学習指導要領」ではなく、「来るべき未知の未来で活躍できる一部のエリートの子だけの学習指導要領」という臭いがぶんぶんしてくるのである。

3. 私たちは私たちの取り組みを！

今回の学習指導要領は学習目標と内容の規定のみならず、「アクティブラーニング」という形で、その方法まで指定してきた。そしてそれは新学習指導要領が実施される前の段階ですでに失敗しているが、文科省も「アクティブラーニングの視点で……」と、ことばを変え、姿勢を崩そうとはしない。

私たちは、文科省が発信する前から、「子どもたちどうしの教え合い、学び合い」を大切にし、それを実現する方法として「グループ学習」を大切にしてきた。

また、教育内容も「技術の分析と総合」を大切にしたスモールステップによる「系統的な学習内容」を意識してきた。「アクティブラーニング」で行おうとしてきたことは、すでに同志会の中では当たり前のように意識され、取り組んできたのである。

問題は私たちが自分たちのやってきたことを「アクティブラーニング」と呼ぶかどうかである。何人も支部会員が「アクティブラーニングではなく、『主体的な学び』。カリキュラムマネジメントではなく、『自主教育編成』！」と発信している。私も全く同感である。

(辻内)

